

新たな北海道総合開発計画に関するシンポジウム

－「ほっかいどう学（北海道学）」の展開に向けて－

北海道教育大学教育学部 今 尚之

1. はじめに

- 北海道には歴史がないっていうけれど？
 - 時間が長いから歴史があるのではなく、手間ひまをかけたかどうかが歴史。
 - その手間ひまは「物語」として語られ、記録され、継承されなくてはならない。
 - 同時に、常に新たな「物語」が生まれることが、よりよい北海道づくりに必要なこと。

2. 北海道開発と土木事業、土木技術

- 北海道開発での技術的な課題
- 計画的、組織的に取り組まれてきた北海道開発
- すぐれた人材によって、北海道開発に必要な技術が生み出されてきた

3. 開発を支える学び

- 学校教育と社会教育
 - 学校教育：社会に出るための学び
 - 社会教育：社会を創るための学び
- 生涯学習
 - 学校教育＋社会教育＋家庭教育 ＝ 生涯学習
 - 知識を獲得すること＋実践力を身につけること
 - 課題を見出し、課題を解決するためには「学ぶこと」が必要

4. 学びを支える環境づくり（学びを支える社会基盤づくり）

- イリッチ（Ivan Illich（1926 - 2002）, アメリカの教育思想家）による学びの資源
 - 学びの4資源（事物、模範、仲間、年長者）
 - 4つの資源に出会う学びの場としての、「オポチュニ ティ・ウェブ」
- 社会教育施設としての図書館、博物館が持つ機能と、教育専門職の役割は極めて重要
 - 教育基本法－社会教育法の下で保障されている、図書館、博物館
 - 地域を学び、学んだ成果が蓄積される施設としての、図書館、博物館
 - 学校と同じように、図書館、博物館は「ほっかいどう学（北海道学）」の拠点の一つ
 - 図書館、博物館は無料の貸本屋であったり、骨董品展示場ではない。司書、学芸員という専門職が、学びをサポートしている。
 - 教育委員会には「社会教育主事」という教育専門職が配置されている。自治体の教育計画の立案や地域の学習講座の企画、地域住民による学習団体への助言などを行っている。「ほっかいどう学」の推進にとって、社会教育主事の専門性や経験を見過ごすことはできない。
- アーカイブスの必要性
 - 一人ひとりの開発の物語が記録され、保存されることで蓄積が生まれる。蓄積がなければ魅力ある教材はつくりえない。素材がなければ、学びは生まれない。
 - 一人ひとりの開発の物語はどうやって記録され、保存されるのか
 - ICTの進歩が記録作成を容易にする。共有（わかちあい）を容易にする。
 - デジタル化の進展は、保管場所の問題を解決し、A I 技術の進展が検索の問題を解決する。

5. まとめ（提言）

- 「ほっかいどう学」を支える、社会基盤としての「北海道開発アーカイブス」
- 「ほっかいどう学」を支える、教育専門職の理解促進、研修機会の充実
- 「ほっかいどう学」に取り組む機運づくりと、取り組む住民への支援、環境整備
- 「ほっかいどう学」の取り組みから生まれてきた、学習成果の発表、共有、蓄積